施工者に幸あれ 第84回

ロマンのかけ橋・土木と建築をつなぐ

渡邉竜一

朝倉幸子◉TH-1
illustration:Taco

■建築を離れて

渡邉竜一さんは「肩書きはお好きなように」と言う。エンジニアリングとデザインをつなぐスーパーバイザーとでも言おうか。高校生になった頃，印象派の画家，エゴン・シーレの絵画に衝撃を受けて「表現することとは何か」と自問する。そして，得意分野の物理や科学をやめて東北大学工学部建築学科で建築を学ぶ。大学院工学研究科の修士にまで行きながら，建築に対しては違和感を覚えていたとか。「建築が世の中のすべて」の周りを見ていて「気持ち悪いな」とさえ思い，学生時代は都市計画に浸かる。公共で誰もが使う場所のデザインがしたいという想いから，韓亜由美さんが主宰するスチュデェオ・ハン・デザインで8年間，土木構造物や高架橋など外部空間のデザインに携わる。韓さんの知り合いで橋梁デザインの構造デザイナーとして活躍するローラン・ネイさんと巡り会いベルギーに渡る。Ney & Partnersで30歳から4年半勤務した。広場，橋梁や歩道橋などを手がけて帰国後に，ネイさんのパートナーとして2012年にNey & Partners Japanを開設。三角港キャノピーで第11回日本構造デザイン賞受賞，プロポーザルで取った出島表門橋のプロジェクトの成功へとつづいたのです。

■出島表門橋を導く

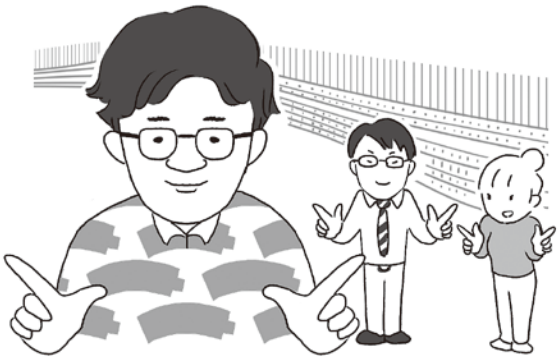
ローラン・ネイさんと渡邉竜一さんのつくった橋は，長崎の歴史を市民に思い起こさせてロマンが溢れる作品となった。最初考えた基本コンセプトは理論的なもの。38.5mの橋を片側だけで支え，かつ上部に構造物を突出させないという難しい設計。この構造的な斬新さは29年度土木学会田中賞を受賞したことでも実証された。日本の一般的な橋梁設計では，初めに構造形式ありきでいくつかのパターンから選んでいく。渡邉さんたちは，形を決めずにさまざまな方向から意味付けを考え，そのうえでそれぞれの条件に対する総合的な解としてのデザインを探し出す。「一般的なエンジニアとは少し異います」。

出島表門橋を成功に導けた大きな要因に，長崎市役所の建設局長をはじめ，担当者が皆積極的だったことがある。当初は反対運動も起きたが，そのときにも「設計者を前に出してくれた」。役所の人たちとの信頼関係があったからこそ，市民と直接話し合い，最後には，反対派の人に「渡邉さんたちがつくるものならいいよ」と言ってもらえた。こうして築いた多様な立場の人びとによって推進されたのだ。

プロジェクトの基本設計途中で「海から橋を運ぼう」と思いつく。なぜなら【かつて見たことがないものが海から入ってきた出島】なのだから！懸念された県の港湾課や警察との折衝もクリアできたのだ。メディアも押しかけ，渡邉さんが思いついた企画は全国区となって「祭りになりました」。

■ふたたび建築も

実は，法政大学で講師として土木を教えて2年になる。実務の設計では，カバーできない内容を研究したいと考えるようになったから。理論武装が目的ではなく，研究からのフイールドバックがプロジェクトを推進するための手がかりになる。多様な価値観の時代では「一人でやれることに限りがある」。

全国のスチールの工場とは数社と直接相談ができる関係。よいものをリーズナブルな価格でつくるためにも，流通にも切り込んでいく姿勢なのです。

渡邉竜一さんの，人を虜にできる能力は育った環境が影響しているのかもしれない。山梨県の旧家で，面倒な人付き合いを見てきたから「人は，説得するのではなくて話をよく聞くことが，信頼関係を構築する基本」と体得してきた。覇志堂Jrも虜になった一人です。